

# ダニエル書 - 第九十六号

預言の三重の適用：終末の時代のための預言的枠組みを解き明かす

Jeff Pippenger

2024-02-29

ウィリアム・ミラーの預言的メッセージの枠組みは、異教と、その後続く教皇制という二つの荒廃させる勢力であり、フューチャー・フォー・アメリカの預言的メッセージの枠組みは、異教、続いて教皇制、さらに背教的プロテスタントという三つの荒廃させる勢力であるが、終末においてはそれらはすべて同時に併存する。ミラーの預言理解にとっての主要な預言の鍵は、ダニエル書にある「the daily」が異教の象徴であるという点であった。というのも、それが、彼の預言理解の枠組みとなった二つの荒廃させる勢力の連関を確立したからである。フューチャー・フォー・アメリカの預言理解にとっての主要な預言の鍵もまた、ダニエル書にある「the daily」が異教の象徴であるという点である。というのも、異教の歴史的成就がダニエル書11章40節と41節における出来事の順序を確立し、それがフューチャー・フォー・アメリカの預言理解の枠組みとなったからである。

新たな光がもたらされると常にそうであるように、ソ連崩壊の1989年に封印が解かれた真理の前進は、多くのさまざまな声から激しい反発を受けた。真理に向けられた抵抗は、例外なく、その真理のいっそう明確な理解を生み出した。ダニエル書十一章の最後の六節に見いだされるその真理に対して起こった初期の論争の中で、聖書に示されたいくつかの預言の規則が、1989年にダニエル書の封印が解かれたときに生じた知識の増加を支える不可欠な証拠として認識された。私たちは現在、それらの規則の一つ、私たちが「預言の三重適用」と呼ぶものを検討している。

私たちは、あるレベルでは同じ系統だが別のレベルでは異なる、二つの三重の適用の検討から始めた。ローマの最初の二つの現れ（異教ローマと教皇ローマ）が、三つ目の現れである現代ローマを確立する。バビロンの最初の二つの現れ（バベルとバビロン）が、三つ目の現れである現代バビロンを確立した。現代ローマは、現代バビロンがそれに乗り、支配している黙示録17章の獣である。両者はカウボーイとその馬ほどにはっきり区別されるが、互いに霊的姦淫も犯すので、そのレベルでは一つである。これと同様の関係を持つ三重の預言の適用が、他にも二つある。

エリヤの最初の二つの顕現（エリヤとバプテスマのヨハネ）は、終わりの時代の第三のエリヤを確立する。それとあわせて、「契約の使者」のために道を備える最初の二人の使者（バプテスマのヨハネとウィリアム・ミラー）は、終わりの時代に「契約の使者」のために道を備える使者を確立する。これら二つの預言の三重適用の系列について、認識すべき重要な点が三つある。

第一の点は、予言の三重適用の二つの系列における実際の歴史的代表者は本質的には同じ歴史的人物であるが、二つの表現における彼らの目的は明確に異なるということである。第二の点は、互いに密接に関連する二つの予言の三重適用の間の相違が何であるかを認識することである。その相違とは、エリヤは終わりの日における外的な働きを表し、契

約の使者のために道を備える使者は終わりの日における内的な働きを表す、ということである。

注意すべき第三の点は、アルファでありオメガであるイエスが、第三のエリヤと、道を備える第三の使者を、最初のエリヤの使者と最後のエリヤの使者、そして契約の使者のために道を備える最初の使者と最後の使者の双方と同一視しているということである。第一の天使のエリヤの使者と第三の天使のエリヤの使者がエリヤの第三の成就を成しており、また、道を備える使者は、第一と第三の天使の双方の運動の使者として表されている。

預言者エリヤは、カルメル山での対決において、神の民と現代ローマの三重連合との終末時代の対決を例証している。

カルメル山はイスラエル北部の地中海沿岸近くに位置する。概ね北西から南東へ延び、約39マイル（63キロメートル）にわたって続く顕著な山稜をなしている。メギドの谷（イズレエル平原としても知られる）はカルメル山の南東に位置する。カルメル山とメギドの谷は互いに比較的近い距離にある。両者の直線距離は約20～25マイル（32～40キロメートル）である。カルメル山の西には地中海があり、メギドの谷およびイズレエル平原の東にはガリラヤ湖（ティベリアス湖、キネレト湖としても知られる）がある。

黙示録では、ハルマゲドンの戦いはメギドの谷を指しているが、靈感は、預言を学ぶ者たちに黙示録がそのメッセージを文字どおりに示しているのだと信じてほしくはなかった。そこで、ハルマゲドン（メギド）をハルマゲドンと示すにあたり、「山」を意味する語「har」を用いて、その戦いが、竜と獣と偽預言者が世界を導く最終的な戦いの霊的表現であることを明らかにした。

メギドをハルマゲドンと特定することによって、ヨハネはそれが文字どおりの地理的な場所として理解されないようにした。というのも、メギドは谷であり、山はないからである。すぐ近くには、エリヤがアハブとイゼベルの預言者たちと対決したカルメル山があり、したがって、メギドとカルメル山はともに、ハルマゲドンにおける最後の戦いの象徴である。

エルサレム、カルメル山、メギドの谷を頂点として三角形を描くと、エルサレムはその三角形の南東の角に位置し、カルメル山は北西に、メギドの谷は北東に位置することになる。ハルマゲドンの戦いを象徴的に表す地域は二つの海に挟まれており、北の王（現代のバビロンの淫婦）は、その二つの海と栄光の聖なる山との間でその終わりを迎える。そしてその時、人間の猶予期間が終わる。

しかし、東と北からの知らせが彼を不安にさせる。それゆえ彼は激しい憤怒をもって出陣し、滅ぼし、多くの者を徹底的に滅ぼす。彼は海と海の間にある栄光の聖なる山に、自らの宮の天幕を張る。しかし彼はその終わりに至り、彼を助ける者はひとりもない。その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来その時までかつてなかったような苦難の時が来る。その時、あなたの民は救われる。すなわち、書に記されている者は皆。ダニエル書 11:44-12:1

エリヤの三重の適用は、神の民の、竜と獣と偽預言者から成る三者連合の頭である北の王との外面的な対決を表している。この三者連合を象徴したエリヤの三つの敵は、北の十部族の王であったアハブ、バビロンの大淫婦を表すイゼベル、そして偽預言者を表すイゼベルのバアルの預言者と聖林の祭司であった。アハブが治めた十部族は黙示録十七章の十人の王を表し、彼らはバビロンの大淫婦と姦淫し、また「一時間」、すなわち日曜法の危機の「その時」のあいだ、王国をその淫婦に与えることに同意する。

日曜法の危機は、間もなく米国で施行される日曜法から始まり、ミカエルが立ち上がるときに終わる。その日曜法が到来すると、黙示録18章の第二の声が、神の他の群れをバビロンから召し出す。バビロンからの召し出しから恵みの時の終わりまでの期間は、大淫婦バビロンの裁きの期間である。また、これは聖霊が制限なく注がれる時期でもある。これは、もはや忘れられていないツロの淫婦と十人の王たちが共同統治することに同意する「時」でもある。それはまた、黙示録11章の大いなる「地震」の「時」であり、その時に十四万四千人が旗印として掲げられる。

そして、彼女と淫行を重ね、彼女とともに贅沢に暮らしてきた地上の王たちは、彼女が焼かれる煙を見て、彼女のために泣き悲しみ、嘆くだらう。彼女の苦しみを恐れて遠く離れて立ち、「ああ、ああ、大いなる都バビロン、力ある都よ。わずか一時間のうちにあなたへの裁きが来たのだ」と言う。黙示録 18:9-10。

ヨハネが、文字どおりの真理ではなく霊的な真理を示すために、メギドをメギドの山（「ハル」）と呼んだのと同様に、バビロンの淫婦とツロの裁きは『時』に、また『日』にも起こるものとして示されている。

それゆえ、彼女のわざわいは一日のうちに来る。すなわち、死と悲しみと飢饉である。彼女はまた、火によってことごとく焼き尽くされる。彼女をさばく主なる神は力強いからである。黙示録 18:8

1844年10月22日以降、預言的な期間はもはや預言的な意味で適用されなくなり、したがって教皇権に対する裁きは「一時間」に、また「一日」に起こるものとして表現されている。その裁きの「一時間」とは、アメリカ合衆国における日曜法から恵みの時が閉ざされるまでの預言的な期間を指す。終わりの時代のエリヤを考える際には、この期間を見定めておくことが重要である。というのも、エリヤのカルメル山での戦いは、終わりの時代の神の民に対する内的な試練の後に続くからであり、また、教会と世の双方に対するその試練の期間は、同じ預言的な始まりと終わりを含んでいるからである。

黙示録18章の二つの声は、二つの教会への二つの異なる召しを表している。最初の教会とは、黙示録7章の十四万四千人を指し、召される第二の教会とは、黙示録7章の大群衆である。十四万四千人への召しは、聖霊が量を限って注がれている間になされ、大群衆への召しは、聖霊が限りなく注がれているときになされる。

預言者はこう言っている。「私は、別の御使いが大いなる権威をもって天から下ってくるのを見た。彼の栄光によって地は照らされた。彼は力強い大声で叫んだ。『大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪霊どもの住みかとなった』」（黙示録18:1、2）。これは第二の御使いによって告げられたのと同じメッセージである。バビロンが倒れたのは、「彼女がその淫行の怒りのぶどう酒をすべての国々に飲ませたからである

」(黙示録14:8)。そのぶどう酒とは何か——彼女の偽りの教義である。彼女は第四の戒めの安息日の代わりに偽りの安息日を世に与え、また、エデンでサタンが最初にエバに語った偽り——魂の自然不滅——を繰り返してきた。彼女は他にも多くの類似した誤りを広く広め、「人間の戒めを教義として教えている」(マタイ15:9)。

イエスが公の宣教を始められたとき、神殿を冒瀆による汚れから清められた。宣教の働きの最後の行為の一つは、神殿の二度目の清めであった。同様に、世に警告を与える最後の働きにおいて、教会に対して二つの明確な呼びかけがなされる。第二の天使のメッセージはこうである。「倒れた、倒れた、大いなる都バビロンは、彼女はその姦淫の怒りのぶどう酒を諸国の民に飲ませたからである」(ヨハネの黙示録14章8節)。そして第三の天使のメッセージの大いなる叫びの中で、天からこう言う声が聞こえる。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、その災いを受けないために。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである」(黙示録18章4、5節)。『セレクトッド・メッセージズ』第2巻、118頁。

力ある御使いが、黙示録第十八章の成就として下って来た。それは、イスラムの「東風」の到来とともに、ニューヨーク市の巨大な建物が2001年9月11日に倒壊したときである。彼はそれから、力強い大声でこう叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。悪霊どもの住まいとなった。」そして四節では、天から別の声が聞こえ、「わたしの民よ、彼女から出て来なさい」と言う。これら二つの声は「教会に向けてなされた二つの別個の呼びかけ」である。終わりの時代における神の二つの別個の教会は、十四万四千人と大群衆として示されている。

十四万四千人に対する試練の期間は、イザヤが「東風の日」と呼ぶ第三の災いとしてのイスラムから始まる。その試練期間は、まもなく米国で制定される日曜法と獣の刻印の強制によって終わる。獣は偽の「北の王」、すなわち現代バビロンの頭である。バビロンはダニエル書七章の獅子であり、ラオデキヤ的アドベンチズムを表すユダからの不従順な預言者は、イスラムの「ろば」(2001年9月11日)で始まり「獅子」(現代バビロン)で終わる期間に死ぬ。

ラオデキヤ的アドベンチズムの不従順な預言者の「墓」と表される時期には、後の雨が量り与えられ、十四万四千の教会への明確な召しがなされる。その時期が終わり、アメリカ合衆国における日曜法を表す「大地震」の「時」に至ると、獣の刻印、すなわち北の王の刻印が施行されるとともに、黙示録18章の第二の声の期間が到来する。同時に、第三のわざわいのイスラムが、背教した世界に対して段階的に増大する裁きをもたらすために用いられる。その第二の明確な召しの間に、「大群衆」の教会に対して十四万四千の「旗印」が宣べ伝えるメッセージは、「北の王」の「刻印」と、「東の子ら」と表される第三のわざわいのイスラムの役割を識別する。

ダニエル書11章44節で教皇勢力を激怒させる知らせと、最終的な教皇勢力による流血の惨事を引き起こす知らせは、「東からの知らせ」(イスラム)と「北」(獣の刻印)として表されている。その期間においては、前の期間と同様に、「東風」のイスラムがアメリカ合衆国に裁きをもたらして始まり、北の王が「海と栄光の聖なる山との間」、メギドの谷とカルメルでその終わりに至るときに終わる。

不従順なラオデキヤの預言者の死に床が諸教会への最初の明確な呼びかけで終わったのと同様に、彼女の死に床（墓）を表す現代のバビロンに対する審判の期間は、東の象徴に始まり、北の象徴に終わる。ベテルの偽りの預言者とユダの不従順な預言者の双方が葬られている墓（死に床）は、「ろば」と「獅子」の間にあるものとして表されている。

エリヤは、アハブ、イゼベル、そしてイゼベルの預言者たちに代表される三重の敵に直面した、神の終末の民を象徴している。イゼベルは、第四の教会であるテアテラにおける教皇権の象徴であり、カルメル山では彼女の預言者たちはバアルの預言者と林の祭司によって表されていた。バアルは男神を表し、林の祭司は女神アシュタロテを表していた。したがって、イゼベルの偽預言者は男性と女性で構成されており、それは黙示録において獣の像によって象徴される教会と国家の結合を示している。

獣の像をまずアメリカ合衆国で、そしてその後世界で立てるのはアメリカ合衆国であり、三重の連合の偽預言者でもあるのはアメリカ合衆国である。十部族の王アハブは、黙示録17章の十人の王、すなわち竜を表し、イゼベルは獣である。エリヤは、誰の助けもなくバビロンの大淫婦がその終わりを迎えるカルメル山で、現代バビロンの三重の連合と対峙した。エリヤの三重の適用は、終わりの時の神の民に向けられる外的な対立を表しており、またエリヤは、その三つの勢力と直接対峙する預言者を表している。

エリヤの物語の重要な要素は「雨」であり、それは対決の歴史の中で注がれる後の雨を表している。カルメル山での対決に至るまでの間、エリヤは、自分の言葉によらなければ雨は降らないとはっきり述べていた。イゼベルの裁きの「時」に至るまでの期間は、教会に与えられた最初の明確な「声」で表される期間である。その「声」は2001年9月11日に到来し、その期間、「雨」は「量られた」だけであり、その期間には、ハバククの論争に関わる二つの競合する後の雨のメッセージがあった。一つはタンムズのために泣くという偽りのメッセージで、それは「平和と安全のメッセージ」を表し、もう一つはイスラムの第三の災いという真のメッセージであった。

真の「後の雨」のメッセージは、第三の災いにおけるイスラムの役割に基づいていた。そのメッセージは一つの出どころ（Future for America）から発し、歴史が真のメッセージの正当性を確認するまで、二つのメッセージは覇権を争った。そして歴史はまた、このような時代における「平和と安全」というメッセージの愚かさも確認した。

ダニエルとヨハネの預言は理解されるべきである。それらは互いに解き明かし合う。それらは、誰もが理解すべき真理を世界にもたらしている。これらの預言は、世界において証しとなるべきである。この終わりの時代にそれらが成就することによって、自ずから明らかになる。クレス・コレクション、105。

エリヤの三重の適用における最初の成就是、イエスがバプテスマのヨハネだと指摘した第二のエリヤによって確認される。ともに、その二人の証人が第三のエリヤを確立する。

彼らが去ったのち、イエスは群衆に向かって、ヨハネについて語り始めた。「あなたがたは何を見に、荒れ野へ出て行ったのか。風に揺れる葦か。では、何を見に出て行ったのか。柔らかな衣を着た人か。見よ、柔らかな衣を着る者は王の宮殿にいる。では、何を見に出て行ったのか。預言者か。そうだ、あなたがたに言う、預言者以上の者だ。というのは、こう書かれているその人だからである。『見よ、わたしはあなたの前に

使者を遣わし、あなたの前にあなたの道を備えさせる。』まことにあなたがたに言う。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりも偉大な者は現れなかった。しかし、天の御国で最も小さい者でも、彼より偉大である。バプテスマのヨハネの日以来、今に至るまで、天の御国は激しい襲撃を受け、激しい者たちが力づくでそれを奪い取っている。すべての預言者と律法は、ヨハネに至るまで預言したのである。もしあなたがたが受け入れるなら、来るはずのエリヤはこの人である。聞く耳のある者は聞きなさい。」 マタイによる福音書 11:7-15

次回の記事でこの研究を続けます。

今日、エリヤとバプテスマのヨハネの霊と力において、神に任命された使者たちが、猶予期間の終わりの時と、王の王、主の主として現れられるキリスト・イエスに関わって、まもなく起こる厳粛な出来事に、裁きに定められたこの世界の注意を喚起している。やがて、すべての人は、肉体のうちで行った行いのゆえに裁かれることになる。神の裁きの時が来ており、地上にある神の教会の成員の上には、まさに永遠の滅びの瀬戸際に立っている人々に警告を与えるという重い責務が課せられている。いま繰り広げられている大いなる闘いにおいて何が問題となっているのか、その原則を、全世界で耳を傾けようとするすべての人に明らかにしなければならない。そこに全人類の運命が懸かっているからである。

人類に与えられた猶予の最後の時にあって、すべての魂の運命が間もなく永遠に定められようとしている今、天地の主は、ご自身の教会がかつてないほどに奮い立って行動することを期待しておられる。尊い真理の知識によってキリストにあって自由とされた者たちは、主イエスからご自身の選びの民として、地上の他のすべての人々にまさって恵まれた者と思なされている。そして主は、彼らを暗闇から驚くべき光へと召し出された方の賛美を表すことを、彼らに託しておられる。かくも惜しみなく注がれている祝福は、他の人々へと分かち合わなければならない。救いの良い知らせは、すべての国民、部族、言語、あらゆる民にまで届けられなければならない。

昔の預言者たちの幻の中で、栄光の主は、再臨に先立つ暗闇と不信の時代に、ご自身の教会に特別な光を授ける方として示されていた。義の太陽として、主は教会の上に昇るはずであった。「その翼には癒しがある。」マラキ 4:2。そして、すべての真の弟子からは、いのち、勇気、助け、そして真の癒しをもたらす影響が広まるはずであった。

キリストの再臨は、この地上の歴史で最も暗い時代に起こる。ノアとロトの日々は、人の子の来臨の直前における世界の状態を描いている。聖書はこの時を指し示し、サタンがあらゆる力をもって、また「不義のあらゆる欺き」をもって働くと言明している。（テサロニケ人への第二の手紙 2:9、10）この終わりの時代に急速に深まる暗闇と、無数の誤謬、異端、惑わしによって、彼の働きは明白に示されている。サタンは世界を虜にしているだけでなく、その欺きは、主イエス・キリストを告白する教会にも酵母のように浸透している。大いなる背教は、真夜中のように深い闇へと発展していく。神の民にとって、それは試練の夜、涙の夜、真理のゆえの迫害の夜となる。しかし、その暗闇の夜から、神の光が輝き出す。『預言者と王たち』716、717頁。